

ミレナ・イエセンスカーのモード論（一） （服装編）

— 1920年代チェコに関する文化論的考察 —

半田幸子

キーワード：ミレナ・イエセンスカー／1920年代／チェコ文化史／服装論
／メディア史

はじめに

本研究は、両大戦間期チェコスロヴァキアで活躍したジャーナリスト、ミレナ・イエセンスカー（Milena Jesenská, 1896-1944）の1920年代の記事を取り上げ、彼女がモードという対象とどのように向き合い、どのように捉えていたか、またモードを通していかなるメッセージを読者に発信していたかを考察するものである。

イエセンスカーについては、作家フランツ・カフカ（Franz Kafka, 1883-1924）から送られた100通以上の手紙が書簡集として1952年に⁽¹⁾、また、ブーバー＝ノイマン（Margarete Buber-Neumann, 19019-1989）による伝記が1963年に刊行され、世界中で翻訳刊行されたことで、イエセンスカーを知る人物や研究者による伝記刊行が相次いだ⁽²⁾。その後1989年のチェコスロヴァキアの共産党政権崩壊によって政治的壁が取り払われ、国外からも研究対象として着目されるようになり、2000年代以降、著作研究の成果が出始めたが、著作研究といっても、アンソロジー刊行が主流である。

2003年に英語圏で刊行された『ミレナ・イエセンスカーのジャーナリズム — 両大戦間期中央ヨーロッパにおける批判的声』は、イエセンスカーの記者としての活動に焦点を当てた著作選集であり⁽³⁾、序論において、そ

の活動をまとめている。また2016年にチェコで刊行された『ミレナ・イエセンズカー ― 交差点（著作選集）⁽⁴⁾』は、360本のイエセンズカーの記事を収録する大部の著作選集である。長年にわたって収集されたイエセンズカーの著作の一覧も収録されており、著作研究において大変重要な刊行書である⁽⁵⁾。しかしながら、イエセンズカーの記事は1100本以上あり、その正確な数は未だ判明していない。イエセンズカーの著作研究はまさに緒に就いたばかりである。

本研究では、先述の通り、イエセンズカーが1920年代に多くの数を手がけたモード記事に注目する。それによってカフカとの関係性や劇的な人生ばかりが注目されやすい彼女のジャーナリストとしての活動の一端を明らかにする。同時に、1920年代のチェコ文化のなかでも、とりわけ日本ではほとんど取り上げられることのない女性およびファッションに関する分野に光を当てたい。

なお、用語に関して、一般的には「ファッション」の方が馴染みあると思われるが、本研究では、以下、チェコ語の原語 *Moda* に音声的に近い「モード」を用いる。後述するように、イエセンズカーはモードという語を掲げた紙面に多くの記事を掲載したが、そこでは服飾のみならず、ライフスタイルや女性の生き方も含めたより広範な話題を取り上げ論じている。それらの記事はまた1920年代にほぼ限定される。よって、本研究では、1920年代の記事のみ（彼女の活動に合わせるため、一部1919年および1930年も含むが、後述するように、それらの数はわずかである）を扱うこととする。

以下、本論文の構成は次の通りである。はじめに、イエセンズカーのモード記者生活と1920年代のチェコの時代的背景を概観し、次に、彼女が主に記事執筆および編集に携わった日刊紙および雑誌を取り上げ、彼女のモード記事の傾向をまとめる。その後、彼女のモード記事に見られるおおまかな特徴を二点に絞って明らかにし、さらに記事を服装論とライフスタイル論に分けて、それぞれを項目やカテゴリーごとに詳細に考察し、彼女のモード論を具体的に眼に浮かぶものとしたい。なお、本稿は、本研究の前編として、服装論の一部を考察するものとする。

1. モード記者としての略歴および記事の傾向

1.1. イエセンスカーのモード記者生活と1920年代のチェコ

イエセンスカーは1896年、オーストリア帝国統治下のボヘミア王国の首都プラハに生まれた⁽⁶⁾。イエセンスカーの執筆活動の始まりは翻訳であるが⁽⁷⁾、本稿では詳細は割愛し、モードに関係する彼女の経歴と当時の社会的背景について詳述する。

筆者が把握する限りで、モードに関する記事が最初に掲載されたのは、1920年3月14日付の日刊紙『論壇』(Tribuna, 1919-1928)である。その後、エッセイの寄稿も続けながら定期的にモード記事を執筆し始め、1921年5月には、同紙においてイエセンスカーの学生時代からの友人イーロフスカー(Stanislava(愛称 Stáša) Jílovská, 1898-1955)とともに毎週日曜日発行の別刷り版「モード評」(Modní revue, 1921-1926⁽⁸⁾)を立ち上げるに至った。「モード評」は、創刊当初はわずか4頁であったが、翌年には当初の倍の8頁に増やし、彼女が離れた後には、最終的には16頁まで紙面を拡大した。創刊時の表向きの編集長はイーロフスカーであったが、紙面におけるイエセンスカーの活躍を見るだけで、ウィーン在住の彼女が編集に大きく貢献していたことは明らかである。彼女はこのとき、テキスタイルやパリの流行などに関して専門的な知識を持つ仲間に声をかけ「ミレナチーム」を結成した。

『論壇』は、チェコスロヴァキアの独立(1918年)後まもない1919年2月にイギリスの日刊紙に影響を受けたユダヤ系チェコ語話者が中心となって創刊した新興の全国紙(日刊)である。チェコスロヴァキアの新聞は政党の機関紙であることが一般的であったなか、どの政党からも離れた立場をとる「独立系」を名乗った。ユダヤ系の面々が創刊したとはいえ、ユダヤ系団体の機関紙的役割を担うものでもなく、むしろ独立前からチェコにおけるチェコ人とユダヤ人の言語的・民族的融合を目的としていたほどで、紙面にユダヤ的なものが見られるとしたら、広告主に見られる程度で、紙面に目立った影響は見られなかった。ただし「独立系」といいながら、創刊には初代大統領となったマサリク(Tomáš Garrigue Masaryk, 1850-1937)

も経済的に援助していたため、大統領やその周辺である「フラト⁽⁹⁾」の声を伝えやすい位置にはあった。そのため、発行部数は少ないながらも注目度は高かった。

編集責任者には、当時24歳になろうとする新進気鋭の記者フェルディナント・ペロウトウカ (Ferdinand Peroutka, 1895-1978) が抜擢されており、まさに新しい時代を作ろうとする日刊紙であったといえる。加えて、ペロウトウカは、両大戦間期チェコのジャーナリズム史において重要人物と評価されているが⁽¹⁰⁾、イエSENSカーにとっても、信頼し合える仕事上の良きパートナーとして重要な存在であった。

『論壇』における彼女やイーロフスカーの手がける別刷り「モード評」は軌道に乗った。イエSENSカーは数多くの記事を執筆し、編集にも大いに貢献した。しかし、1922年の末を最後に、「ミレナチーム」と共に、活動の場を『国民新聞』(Národní listy, 1861-1941)に移した。

『国民新聞』は、イエSENSカーの伯母で作家のルーゼナ (Růžena Jesenská, 1863-1940) が以前から随筆や小説を寄稿し、父ヤン (Jan Jesenský, 1870-1947) が愛読していた日刊紙である。イエSENSカーが籍を移したのも、ルーゼナの誘いがあったからである。同紙は、チェコスロヴァキア国民民主党 (独立以前はその前身の青年チェコ党) の機関紙であり、チェコ民族主義路線を敷く保守的な日刊紙であった。同紙の紙面において、イエSENSカーは1929年まで記事執筆および編集を牽引した。ここでの彼女の活躍は目覚ましく、1920年代半ばは彼女がモード記者としてもっとも開花した時期でもある。1925年および1926年には、当該紙上の記事を自ら抜粋および編集したエッセイ集を刊行した。

1926年の秋には、『国民新聞』と同時並行で、グラフィ誌『鮮やかな週』(Pestrý týden, 1926-1945)の創刊にイーロフスカーや他の「ミレナチーム」の仲間とともに携わった。立場的にはイーロフスカーが編集長であったが、イエSENSカーも編集に深く関わった。当該誌は、前衛的な構図の写真も多く掲載した。また、チェコ・アヴァンギャルドの立役者で当時の芸術界を牽引したカレル・タイゲ (Karel Teige, 1900-1951) やイエSENSカーの当時の

夫でタイゲと同グループに所属したモダニズム建築家のヤロミール・クレイツァル (Jaromír Krejcar, 1895-1950) などによる前衛的な記事や写真で誌面を構成した。同時に、当時の前衛グループが傾倒、賛美したロシア革命やソ連のモダニズムを好意的に捉える記事も掲載したため、「ソ連賛美の不用意なプロパガンダ」を理由に、同誌での職は失った⁽¹¹⁾。

イエセンスカーは1928年に長女を出産した。妊娠中に体調を崩し、その原因や病名は諸説あるが、右膝を痛めた。その痛み止めに使用したモルヒネの中毒となり、執筆面にも影響が出た。結果的に、1929年3月に『国民新聞』を解雇された。

その後、先述のペロウトウカが1929年当時、編集長を勤めていた『人民新聞』(Lidové noviny, 1893-1952, 1990-)で採用となった。しかし、当該紙では、1929年4月から1930年6月1日までの約1年間の活動で終止符を打ち、保守派およびリベラル派の表舞台からは消えた。その後、1930年代前半は左翼系の新聞で活動していたようだが、左翼系の新聞では無記名のことも多く、左翼系新聞での彼女の活動の全容はまだ明らかにはなっていない。また、その後1937年代に表舞台に復帰した際には、再度ペロウトウカが編集長を務める政治雑誌『現在』(Přítomnost, 1924-1939)で記事を手がけた、ここではモードから離れ、政治的あるいは社会的な内容の長文のルポルタージュの執筆に文字通り命を捧げた。

以上をまとめると、彼女のモード記者としての活動については、次の要点が挙げられる。まず、その活動は概ね1920年代に集約される。次に、活動媒体の政治思想的傾向はリベラルと保守の間を行き来した。創刊まもない『論壇』から出発し、伝統ある保守系日刊紙の一つ『国民新聞』で隆盛を迎え、リベラルの代表格として現在も評価の高い『人民新聞』でモード記者としての役目を終えた。彼女のモード記事が一世を風靡した1920年代は、チェコスロヴァキア第一共和国時代の前半期で、ちょうど模索から開花を迎えた時期に当たる。

1.2. モード記事の傾向

イエセスカーのモード記事は、一般的な意味でいうモードあるいはファッション、すなわち服飾に関わる記事とは異なるものが多い。タイトルは服飾品を示していても、服飾に関しては、最後のほんの数行しか言及されていないことも珍しいことではない。しかし、筆者はそれらもモード記事として扱っている。なぜなら、モードやファッションという言葉自体、その使われ方は曖昧で、現在でも、ライフスタイルを含めて指すことも多いからである。

第一次世界大戦の終結後、技術の進歩による大量生産制の導入や女性の社会進出など、人々のライフスタイルそのものが大きく変化した1920年代においてはとりわけ、服飾に対する捉え方と生き方との間の線引きが曖昧であったといえる。したがって、本稿においてイエセスカーのモード記事という場合、断りのない限り、服飾品だけでなくライフスタイルに関する記事まで含めることとし、またモード欄・家庭欄・文化欄に掲載された記事すべてを指すこととする。ただし、初期の『論壇』においては、服飾とライフスタイルに関する線引きがまだ比較的明快であったため、「モード評」に掲載されたものおよび服飾に関するテーマを指すこととする。

以下、それぞれの記事の本数も記載するが、それらはすべて「はじめに」で挙げたイエセスカーの著作研究で最新のものといえる2016年刊行の名著『ミレナ・イエセスカー——交差点（著作選集）』に収録されている記事一覧、および筆者の調査結果をもとに分類している⁽¹²⁾。

1.2.1. 『論壇』にて

1920年初頭から1922年12月末にかけての3年間に彼女が『論壇』に発表した記事数は、翻訳を含めて291本⁽¹³⁾ある。そのうち、モード記事は175本を数える。彼女の記事におけるモード記事の割合が顕著に高まったのは、1921年の半ば以降である。それは、「モード評」の創刊とも大きく関係している。「モード評」は週刊ではあったが、各号に2、3本あるいはそれ以上の数の記事を掲載することも頻繁にあったため、モード記事の数は飛躍的に増えた。

テーマは幅広く、下着、レインコート、エプロン、靴などといった実用的なアイテムから、仮面舞踏会を含むパーティー用のドレス、さらには子ども用や紳士向けの服、旅行用の服も含まれる。夏には、水着、冬にはウールなど、季節感も意識しており、テーマからは一般的なモード記事となら変わりはない。流行のモード事情なども定期的に取り入れている。

1. 2. 2. 『国民新聞』にて

『国民新聞』での活動期間は、1922年12月から1929年3月末までである。1922年は、『論壇』をメインとしていたため、当該紙での掲載は不定期であったが、1923年1月からは『論壇』から完全に移籍した。当該紙に掲載された記事で、現時点で確認されているものは翻訳やアンケート募集記事含めて810本ある⁽¹⁴⁾。そのうち、食住や人間関係といったライフスタイルも含める広義のモード記事は、620本ある。つまり、ほとんどがこのカテゴリーに含まれる。しかしながら、『論壇』との違いは、狭義のモード記事すなわち服飾に関する記事とそれ以外、すなわちライフスタイルに関する記事の比率が『国民新聞』のモード記事においては、ほぼ1:2であり、ライフスタイルに関する記事の割合が増加している点である。『論壇』では、テーマを服飾に限定しながら、内容面でその範囲を超えていたが、『国民新聞』では、テーマ自体が服飾を超えてライフスタイルの分野に及んでいることが多いのである。後者においてイエセンスカーの記事は、当初は、モード欄と記されることが多かったが、徐々に明記されなくなり、代わって「今日のコラム⁽¹⁵⁾」と題する欄に掲載されることが増えた。

また、1927年5月27日からは、ほぼ「女性、家事、家族」欄と題する紙面に掲載されるようになった。テーマもさることながら、掲載された紙面を見ても、1920年代後半には、彼女の関心が服飾から女性の生き方へと大きくシフトしたことが分かる。

1. 2. 3. 『鮮やかな週』にて

当該紙における記事は多くはない。携わった期間も、1926年11月の創刊から1927年10月末までとわずか1年間弱であり、その間の記事の本数は28本である。1926年には、スポーツ用の着こなしや、色、飾り、生地、デ

ザイン全般に関する記事など、服飾を扱う記事も手がけたが、1927年の記事は、「映画と文学」や「広告のための広告」あるいは、「児童の宿題」や「友情」「大都市の花火」など、服飾を離れたライフスタイルやいわゆるカルチャーに関する幅広いテーマを扱った。

1.2.4. 『人民新聞』にて

当該紙における記事は、全部で78本見つかっている。そのうち、翻訳が1本含まれてはいるが、ほとんどが「家庭・モード・社会⁽¹⁶⁾」欄に掲載されたもの、すなわち本稿でいうモード記事である。しかしながら、そのテーマおよび内容は、イヴニングドレスやドレス、ツーピース、ブラウスといったパーティー服から日常着、「新しい生活様式について」「モダンな女性とは何か」など、いずれも1920年代前半から半ばと変わらないテーマに終始した。その理由は、彼女自身の心身が不安定な時期であったためで、『国民新聞』に掲載されたテーマや内容を焼き直したものでつなぐことになってしまったからである。

しかし、時代は1920年代終盤、1929年に起きた世界恐慌の影響はチェコスロヴァキアにはまだ及んではいなかったが（直接的打撃は1930年代前半）、それでも世界情勢が落とす不安が緩やかに広がる時代において、イエセンスカーの記事はそぐわないものとなってしまったようである。

1.2.5. 小括

以上、『論壇』から『人民新聞』までのモード記事の傾向をまとめた。要約すると、彼女の記事を時系列に整理するならば、1921年半ばからの「モード評」に代表されるようにモード記事にもっとも忠実で、服飾をもっとも中心的に扱っていた1920年代前半、またモード記事といっても生活や社会、文化・芸術へと視点が大胆に服飾の枠を超えて広がり、テーマ自体も服飾よりも生活や生き方に関するものが大幅に増えた1920年代半ばから後半にかけてが、彼女のモード記事の隆盛を誇った時代である。1928年以降は、病気により徐々に書くこと自体が困難になっていった結果、1920年代の半ばの記事に頼らざるを得なくなり、それにより、時代に先駆けるどころか、追いつくこともできなくなってしまったともいえるだろう。

次章では、彼女の記事の内容を深く掘り下げる。具体的には二つの点からその特徴をまとめたい。一つは、外見と内面という観点から、もう一つは、調和および中庸という点からである。

2. 外見と内面との調和および中庸の重要性

イエセンズカーは、「モードは二の次でどちらかといえばライフスタイルに興味があった⁽¹⁷⁾」、あるいは「1930年代は白襟濃紺のワンピース一着を常に着ていた⁽¹⁸⁾」など、服飾に関心があまりなかったかのように指摘されることがある。しかし、筆者は、そうは考えていない。確かに、イエセンズカー自ら「服は言われているほど重要ではない⁽¹⁹⁾」とか「モードは2列目で付随するだけである⁽²⁰⁾」と記述し、一見、服を大事にしていなかったかのような発言は見られる。しかし、その裏にはより深い意味があったのではないかと考えるのだ。どういうことかということ、服すなわち外見も、それを着る人間すなわち中身もどちらも同等に大事に考えていたのではないかということである。両者に優劣はなく、同等という点が重要である。

モード記者として売れっ子の活躍ぶりを見せていた1925年の10月1日付の『国民新聞』9面にコラム記事「外からと内から⁽²¹⁾」が掲載された。そこには、次のように記されている。

この意味において、誰しも自らの顔、身体、目の表情、それから自らの動きの一致あるいは素っ気なさに対して責任がある。身体は、脳、思考、精神と同様にまさに成形可能であるし、それと同様に完全に愚かな人や、全く醜い人も生まれぬ。顔には明白明瞭な文字でどのような仕事に従事しているか書かれているし、どのような成果を出しているのか内側から顔を照らし出すのである。仕事に従事することは、実用的であると同時に理想的でもある最大のことで、言い換えるなら実用的で効果的な「他の仲間への加入」に対して私たちができる唯一のことである⁽²²⁾。

「この意味において」というのは、この記事の冒頭の一文『その人にはその責任はない』という文が嫌いだ」の理由を長く説明するなかで使われている。人に唯一与えられた大きな義務は、「他の人々に溶け込む」ことであるとする。人々に溶け込む、社会に溶け込むということは、自然のなすがままにはいられない。したがって、本来の自然とは逆行することになる。社会になじむためには、周囲のあらゆる人に役立つものとして自らを育てる必要があるし、共同体の利益を踏み台に自分の損得を考えるような性質は潰していかなければならない。その意味においては、誰しもがすべてに対して責任がある。その意味において、自らの行動、態度、表情など全てに対して責任があるというわけである⁽²³⁾。

換言するならば、社会に属し、社会の中で生きる限り、直接的間接的問わず、すべて社会の影響を受けながら形成される私たちは、自らの思考や行動に責任を持たなければならない、ということであろう。その上で、その思考や行動はまた、その外見、すなわち顔や身体、目の表情および身体の動きに表出するものであるから、その外見にも責任を負わなければならないというのである。それは当然、服装に対しても言えることである。

筆者は、イエSENSカーのこの考えが、彼女のモード論の真髄をもっとも端的に表していると考えている。つまり、彼女にとって、狭義のモードすなわち服装は、それ単体で論じるものではなく、その中身すなわち服を着る人間の身体や、さらにもっと深い内面も含む総体の表れとして論じるべきものなのである。それゆえに、そのどれもが大切である。さらにいえば、それら一つひとつの一致をもっとも大切にしていた。それは同じ記事に書かれている次の箇所から明らかである。

人間の最上級の美しさは調和である。外見的なスタイルのことでない。内面から放射される調和と、一個人の中にある否定的な特性と肯定的な特性のバランスについての話である。[…]

人の為すことはすべて、その人の内面の洗練度と関係しているの
ある。どのような見た目であるか、どのように動くのか、服をどのよ

うに着るのか、足の裏をどのようにおろすのか、どのように笑うことができるのか、どのように握手をするのか、それらはすべて一つの起源すなわち内面の生活の豊かさや品の良さから生じるのである。服が人を作るのではない⁽²⁴⁾。

最後の一文「服が人を作るのではない」というのは、イエセンズカーが頻繁に用いた表現「人が服を作る」の言い換えである。「人が服を作る」は、「馬子にも衣装」に相当するチェコのことわざで「服が人を作る」を反転させたものである。「服が人を作る」は「馬子にも衣装」と同様に「服装や見た目が、他者の印象に影響を与える」という意味である。第一次世界大戦後のチェコでは、混乱の時代において、身なりを良くすることで、自分の境遇を良くすることが可能となったためであろうか、この表現がよく用いられた⁽²⁵⁾。

しかし、イエセンズカーはこのことわざの流行に抵抗した。彼女は、この主語と目的語を入れ替えて、反対の意味になるような文を作り、「服が人を作る」のではなく「人が服を作る」のだと主張した。その意図は、前述の引用に書かれている通り、人の内面が服に現れるということであり、外見だけを着飾るのではなく、外見と内面が一致することによって、人の美しさが引き出されるということである。したがって、服が重要ではないという意味にもならない。それが、外見と内面との一致の重要性につながるのである。それは同時に、中庸を得ることにもつながる。

1924年5月1日付の記事「なんでもほどほどに⁽²⁶⁾」においては、若者に対して中庸のすすめを説いている。イエセンズカーは、この時代、自分磨きという文脈において中庸についてよく語った。中庸とは、文字通り、何事も偏ることなくバランスをとることを指す。つまり、一側面に偏ることなく、あるいは極端に走ることなくバランスよく自分を磨くことということである。その理由は、次のとおりである。

美しい精神と成長した脳は、成長のない身体においては機能しないし、

歪んでしまう。美しく、手入れされた、健康的な身体であっても特徴のない愚かな精神を伴ってはいは、人にとっては厄介で無意味なものである。両面をうまく操る必要がある。両面を同時に調和的に。スポーツに熱を上げている若者たちが、今日、自らの知的な教育を忘れて疎かにしてしまうことを私は恐れている⁽²⁷⁾。

端的に言えば、精神や脳だけが洗練されていても身体の手入れが行き届いていなければ、あるいは不健康であれば意味をなさないし、身体だけが健康で手入れが行き届いていたとしても、精神面が洗練されていなければ、同様にまったく意味をなさないということである。イエSENSカーのこの信条は、1920年代のみならず彼女の執筆活動において一貫したものである。この信条ゆえに、彼女がモード記者として活動した1920年代において、服飾だけでなく、日常のあらゆる事柄をテーマとし、それらの多様なテーマこそが彼女にとってのモードを表していたのだろう。

次節では、彼女が提唱した服装の特徴を通して、彼女が外見に求めた理想を考察する。

3. 服装論：身体と精神の媒介として

本節では、イエSENSカーの服装に関する言説を取り上げ、職場と家庭における服装の特徴を考察し、彼女のメッセージを読み解く。

3.1. 職場で

1921年のチェコの国勢調査の結果を見ると、当時のチェコスロヴァキア全土における女性の就労率は約28%である⁽²⁸⁾。ボヘミアでは1910年に比べ、その数字は下がったのだが⁽²⁹⁾、女性の就労人口全体に占める事務職の割合は、1910年の約19%から約26%へと大きく増加した。その理由は、大量生産やサービス産業の拡大に伴い、女性に限らず事務職およびサービス業が拡充したからである。そのため、特に都市部においては、これらの職に

就労する女性が増えた⁽³⁰⁾。

イエセンスカーは、次頁で詳述するように、自らの記事で「女性の場所
は家庭と子供のそばにある⁽³¹⁾」と述べたが、就業する女性を批判したわけ
ではなく、むしろ応援していた。当然、就業する女性向けの服装について
も言及した。1921年3月20日付『論壇』の記事「働く女性のための服」に
おいては、「働く上で流行は意味をなさないことは分かっている⁽³²⁾」と述
べる。その理由は、袖はすぐに擦れて光ってしまうし、スカートにはシワ
がつくからであって、職場では、古い服を着て仕事をするものだ、と読者
側の立場で語るのだが、同時に、「それを着ては外を出歩かないような服」
と皮肉を加えることを忘れない⁽³³⁾。つまり、仕事をするときには、家事を
するときと同様に、汚れてしまうことを考慮するのが大方の読者だろうと
推測し、外出するときには決して着ないような古びた服を着ることに対す
る批判である。批判的である背景には、読者の職業を、先に述べたような
事務職、あるいはサービス業と想定していた事情があることが、記事から
分かる。

ボロボロの服を着ていくことのできない場所が多い。開業医院の受付、
商業施設の受付や警備員、私立公立問わず学校の教員、付添人、家庭教師、
それから主に、出自の良い女性、学歴の良い女性、ある依存に対する社
会の態度が一変しただけで受刑者になってしまった女性である⁽³⁴⁾。

後半の、出自の良い女性や学歴の良い女性に加え、社会的変化によって受
刑者になってしまった女性も加えている点は興味深い。ある種の価値観の
変化によって、突然受刑者になってしまうことは、戦争と体制転換を経た
ことで、起こり得たことであろう。その、あるとき突然受刑者になってしま
った女性が、なぜボロボロの服を着ていられない存在として取り上げられた
のか、その理由や背景は現時点では調査が追いついていないが、興味深い
記述であり、今後の課題としたい。

ここでは、前半部に注目したい。特に重要なのは、受付や教員など、大

勢の目に触れる職業を想定している点である。人目に触れる職業、なかでも開業医院や商業施設の受付という仕事は、その施設に入って最初に目に触れる場所であり人物である。その施設の顔ともいえる立場に立つものが、古びた服を着ていてはかえって仕事にならないのは容易に想像がつく。また、教員等も同じである。外出できないような服を着て仕事をすることを批判するというのは、一見すると、「服が人を作るのではない」とするイエSENSカーの決まり文句とは、矛盾する。しかし、調和を大事にすることを考えれば、立場にあった服を着用するという意味で、矛盾はない。それは、受付や教員に限らず、タイピストや小売店の売り子、飲食店の給仕係、役所の事務員であっても、変わらないだろう。つまり、職場での服装の第一条件は、清潔さであったといえる。では、清潔さを大事にする職場での服装とは具体的にどのようなものだったのだろうか。

もっとも頻繁に勧められたのは、「コスティーム」kostýmと言われる、ツーピースである。ツーピースに関する記事は、タイトルになったものだけで14本ある。タイトルになっていないものでも、ツーピースについて言及しているものは数多くあるため、イエSENSカーにとって、ツーピースはもっとも重要な服の一つだったといえる。

ツーピースとは、ジャケットとスカートの上セットで着るもので、ジャケットの中には、ブラウスを着用する。ブラウスに関する生地も大変多い。このような服装は、今では機能性からいっても取り立てて優れているとも言い難いが、1910年代頃から形になり始めたもので、この時代には、画期的なものであった。それ以前のヨーロッパでは、ワンピース型のドレスが主流で、上下に分かれているというのは、それだけで機能的であり実用的な服だったのである。イエSENSカーの記事によれば、英国由来のもののようにだ。

彼女は、男性の服装に着想を得たアイデア自体を評価しており、ネクタイやベストの着用もよく勧めていた。また、ブラウスも、男性用のシャツを真似たタイプで、素材や襟の形などはそれまでの女性用のブラウスとは異なる。男性の服装からの借用については、1922年6月の記事で次のよ

うに述べている。

さて、まずはイギリスのブラウスとは何なのか、認識しておこう。男性用の正式なシャツ、それ以上でも以下でもない。モダンな時代において、女性の服装は可能な限り男性用の服に取って代わられた。シャツ、ネクタイ、ベスト、外套、靴、ストッキングなど。確かに、素晴らしいアイデアである。——スポーツで鍛えられ引き締まった若い女性の身体にはこのような男性のものほど似合うものはない⁽³⁵⁾。

女性の服装が男性の服装に取って代わられたのは、1920年代においてである。ある程度の教養のある女性が仕事をする事自体も、時代がもたらす社会的変化に伴うものであり、それに伴って、女性たちの体型にも変化が見られた。1920年代といえば、世界的に、細身の女性が増えた時代でもある。コルセットから解放され、ウエストラインが強調されなくなり、中性的な体型の女性がもてはやされた。

イエセンスカーは、必ずしも機能性や実用性だけを考え、デザイン性に対して関心がなかったわけではなく、美的観点からみても細身の女性に似合うものとして男性服のデザインを女性が着ることを評価し、同時にそれは、時代の流行にも合致していたのである。

3.2. 家庭で

では、次に家庭での服装を見てみよう。一言で家庭といっても、様々な状況が考えられる。例えば仕事をしている女性が、仕事から帰宅後、あるいは休日に家で過ごす時間も考えられる。または、外で仕事を持たず家事をこなす女性が家で過ごす時間、加えて、小さな子供を育てながら家で過ごす女性、など様々な状況が想像される。ここでは、日常着ということから、主婦として家事をこなしながら家庭で過ごす時間の多い女性の服装についてのイエセンスカーの記事を考察したい。

イエセンスカーは女性が家事をする事に対して好意的であった。好意的

というより、むしろ家庭や家事を社会生活と等しく重要なものと捉えていたといってもよい。記事のなかでイエSENSカーは、「女性の場所は家庭や子供のそばにあるのであって、国会や公的生活にあるのではない⁽³⁶⁾」とする彼女に対して、復古主義者だと反発するフェミニズム運動家の女性たちがいることを伝え、それに対して、「料理や掃除をする人を過小評価している⁽³⁷⁾」と批判している。筆者は、このことで直ちに、イエSENSカーを保守的であるとは考えない。しかし、表面的に見れば、保守的であったと捉えられるかもしれない。彼女自身は、フェミニズム運動団体に身を置くことはせず、むしろ頻繁に抗議を受け、論争をしていた。しかしながら、筆者は、イエSENSカーが伝統の保守を望んでいたとも捉えていない。実のところ、フェミニズムからも保守からも距離を置いていたと考えている⁽³⁸⁾。実際、彼女の行動のいくつかを挙げるだけで、彼女が決して保守的でもなかったことは明瞭である。

ここでは、家事をするときの服装をどのようなものと捉えていたか、考察したい。1921年12月18日付の記事「仕事と家庭での女性」では、主婦である女性は、「家庭用のワンピースを持っているべきだ」と述べている。その理由は、「外出着を節約するため」、つまり、外出着をいい状態で保存しておくため、かつ、「家庭でもきれいでいるため」である。では、いったいどんな服が、家庭用のきれいなワンピースだったのであろうか。

もっとも実用的なものは、モダンなワンピースで、ウールのかぎ針編みのもの、簡単に手編みで編んだもの、暖かくて、ほんとうに着心地が良いものである。本当にとっても素敵なものは、両面フランネル製のもの、あるいはピロード製のものだ。もっともいいのは、白い襟とカフスのついたシンプルなもので、その襟とカフスは、ボタンで止め外しができて、必要に応じて簡単にデザインを変えられるようになって

家庭用のワンピースの条件は、きれいなものであって、外出用のワンピース

スとは別物だという二点である。ここでは動きやすさなどについては特に触れてはいないが、実用的であることと、着心地の良さは重視している。この記事は12月の記事であるため、暖かさにもこだわる。したがって、素材はウールやフランネル、ピロードが挙げられる。同時に、手編みであることや、それが簡単に編めるものであること、シンプルなものであることも、さりげなく触れられている。つまり、取り立てて飾りつけたり、凝った作りにしたりのではなく、あくまでもシンプルで簡単に作ることができて、実用性と機能性を備えたものでありながら、素朴すぎず、洗練されたものを理想としていたことがわかるであろう。

家庭においても、きれいな格好でいることを求めていた点は重要である。その点に関して、読者からは、苦情めいた投書が送られていたようである⁽³⁹⁾。それは記事の中で、イエセンスカー自身が述べていることだが、苦情の内容は、家事や育児で忙しく、すぐに汚れるのに、きれいな格好などでいられないといったものである。それに対して、

3時間着て汚れたらまた着替えたらいいいではないか。[...] 汚れるために服を着るのに、いったい何が不幸なのか？何に対して？家事はすべて、したことを帳消しにされるためにするのに⁽⁴⁰⁾。

と応じる。引用最後の一文「家事はすべて、したことを帳消しにされるためにするのに」とはつまり、食事を用意すればそれは胃の中に入ってなくなり、掃除をしてきれいになった部屋も使うことで散らかり、洗濯をしてきれいになった服は着ることでまた汚れるといった具合に、すべての家事は、行った後にまるで帳消しにされ、完結することはない、という意味である。

「3時間着て汚れたらまた着替えたらいいいではないか。[...] 汚れるために服を着るのに」と言われると、読者にとっては、身もふたもない話のようだが、同時に、エプロンの着用も勧める。掃除のときには濃い色のものを、料理のときには淡い色のものをなどと具体的なアドバイスも加える。濃い

色とは、紺色などが推奨され、また無地だけでなく、水玉柄や縞柄、黒色のエプロンも良い例として挙げられる。淡い色というのは、淡褐色がよいとするが、それ以上詳しいことはわからない。エプロンは、服を汚さないためであり、服を守ればそれでいいのかといえば、そこはエプロンにもこだわりがある。やはり、見た目がきれいになるようなものを求めるのである。

したがって、イエSENSカーの記事にみる家庭で着る服は、実用性や機能性も兼ね備えながら、見た目には、派手すぎず、しかしながらきちんとして見える、きれいなものだとまとめることができる。

3.3. 小括

以上、職場での服装と家庭での服装を見てきた。具体的に挙げれば、違いは大きい。

職場においては、「コスティーム」が主である。現在でいうところの、スーツの扱いであろうか。一方、家庭での服装では、ワンピースにエプロン、素材は季節によっても異なり種々あるが、少なくとも、家庭での服装に「コスティーム」が勧められることはない。やはり、ワンピースが主で、そのほか、様々なエプロンが紹介される。

職場と家庭での服装の大きな違いといえば、この点であろう。しかしながら、この二つには共通項もある。それは、実用性、機能性、見た目のきれいさである。これらは、いずれの場の服装においてももっとも重視される項目である。ここに彼女の、求めるモードの理想が反映されている。つまり、外見と内面の調和の表れといえる。見た目のきれいさ、きちんとしている様、あるいは清潔さ、これらと実用性や機能性を兼ね備えたものが、彼女にとって美しいものであり、理想的な服装だといえる。

機能性や実用性を重視したのは、彼女だけではない。それは時代の要請に応えたものであったといえる。20世紀を代表するデザイナーのシャネル(Coco (本名 Gabrielle) Chanel, 1883-1971) もまた、実用的で機能的なデザインを手がけたことで知られる。シャネルについて記された書籍は数多く

あるが、そのなかの一つの書籍に「彼女のスタイルはすっきりとして美しい。が、みすばらしくない⁽⁴¹⁾」という記述がある。このスタイルは、イエSENSカーが描写するスタイルとまさに一致する。イエSENSカーが求めたスタイルは、決して独りよがりのものであったわけではない。それは、第一次大戦によってもたらされた女性の社会的自立とも関係しているだろう。

だが、イエSENSカーは、家庭での女性に対しても批判的ではなく肯定的に服装を提示していることから、精神的自立をより求めていたといえる。精神的自立とは、家庭の様々な仕事を自らの意思で合理的にこなすことも一つである。そのためには、実用的で機能的でなければならない。かつ、みすばらしくあってはならない。精神的に自立した女性の凜とした身なりを求めたのである。

最後に、彼女が提唱するモード記事が、家庭にいる女性に対してだけ、あるいは働く女性に対してだけ、などどちらかに偏ることがない点も重要であることを指摘しておかなければならない。それは、彼女の中庸の精神にもつながるものである。家庭を守ること、あるいは仕事をして経済的に自立すること、それらのどちらか一方だけを認めるのではなく、どちらの立場も認め、どちらも重視していたことは、服装論を見ても明白であろう。

おわりに

本稿では、イエSENSカーのモード論のうち、服装編として、服装に関する言説を考察してきた。「はじめに」で述べたように、イエSENSカーのモードは、服装に止まらず、文化、芸術、食、住居を含むライフスタイル全般に及んでいる。特に1920年代半ばから後半にかけては、それらをテーマにした記事の方が多い。服装だけを見ても、ここでは語りきれないテーマも多くある。たとえば、1920年代には特に流行したスポーツをテーマにしたものも多い。また、雨の日に関する服装をテーマにしたものもいくつも見られる。そのほか、イヴニングドレスについても何度も取り上げており、服装編だけでも、まだ考察対象が残されている。また、ライフスタイルに

つについては、身体の手入れ、人間関係、夫婦関係、子育て、建築やインテリアなど、幅広いテーマが取り上げられている。それらの言説もすべて、外見と内面の調和に帰結するものであろう。

次号では、後編としてライフスタイル論を提示する。そこで、イエSENSカーが、1920年代のチェコを生きる読者にどのようなライフスタイルを提示していたのかを明らかにしたい。

註

- (1) Franz Kafka. *Briefe an Milena*. hrsg. von Willy Haas. Frankfurt a M.: S. Fischer, 1952.
- (2) Margarete Buber-Neumann. *Kafkas Freundin Milena*. München: Gotthold Müller, 1963、イエSENSカーを知る人物の伝記は、彼女の娘によるものが Jana Černá. *Adresát Milena Jesenská*. Praha: Klub přátel poesie, 1969 (1963年に印刷された未刊行のコピーがチェコの国立図書館に収蔵されている)、学友であり同僚によるものが Jaroslava Vondráčková. *Kolem Mileny Jesenské*. Praha: Torst, 1991。以下、研究者による伝記および著作選集を時系列に挙げておく。Milena Jesenská. *Allerst ist Leben: Feuilletons und Reportagen 1919-1939*. Dorothea Rein (ed.) . Frankfurt a M.: Neue Kritik, 1984 (著作選集)、Marta Marková-Kotýková. *Mýtus Milena: Milena Jesenská jinak*. Praha: Primus, 1993 (著作選集含む)、Alena Wagnerová. *Milena Jesenská: Biographie*. Frankfurt a M.: Bollmann, 1994、Mary Hockaday. *Kafka, Love, and Courage: The Life of Milena Jesenská*. Woodstock, New York: The Overlook Press, 1995、Kathleen Hayes. *The Journalism of Milena Jesenská: A Critical Voice in Interwar Central Europe*. New York, Oxford: Berghahn, 2003 (著作選集)、Milena Jesenská. *Křižovatky: výběr z díla*. Marie Jirásková (ed.) . Praha: Torst, 2016 (著作選集)。
- (3) Hayes, *op.cit.*
- (4) Jirásková (ed.) , *op.cit.*
- (5) この他、ドイツ語からの重訳ではあるが、松下たえ子編訳『ミレナ 記事と手紙』みすず書房、2009年も日本語で読める貴重な刊行書として挙げておかなければならない。
- (6) 以下、本節は主に、Hayes, *op.cit.*、Vondroáčková, *op. cit.*、Lenka Penkalová. *Rubriky pro ženy v denním tisku 20. let 20. století a jejich autorky: Olga Fastrová, Marie Fantová, Milena Jesenská, Stáša Jilovská a Zdena Wattersonová*. Doktorská práce. UK FSV, 2011を参考にしている。

- (7) 多くの伝記では、1919年12月30日付『論壇』一面に掲載されたエッセイ「ウィーン」が最初とされている。しかし、チェコのメディア史研究者ペンカロヴァーがその博士論文 (Penkalová, op.cit.) の中で指摘するように、1919年11月9日にはすでに、後述の記事「ウィーン」のペンネームと同じ M.P. の名で、フランス・ジャムの「楽園」の翻訳記事が掲載されている (イラースコヴァーも2016年の著作選集に収録)。もっとも、ペンカロヴァーは、1919年11月4日の一面に掲載された記事「映画の新潮流」が最初ではないかと指摘し、その理由を当該記事のペンネームが、イエセンズカーが1920年代初頭に多用したペンネーム A. X. Nessey や AX.、AXN と同じだからとしている。しかし、当該ペンネームは厳密には、a. x. であり、多用した A. X. Nessay や A. X. N. とは異なる上、記事の内容からもこの説には疑問符がつく。(ちなみに、A. X. Nessey は Jesenská を逆さ読みにしたものである。) 筆者は、現時点においては1919年11月9日の翻訳記事が最初のものと考えている。1919年11月にはフランス文学やドイツ語文学の翻訳が掲載された。前述のエッセイ「ウィーン」は、花形である一面の下段にある「(Fejeton: フランス語の Feuilleton からの外来語でチェコ語読み)」と呼ばれる文芸欄に掲載された。
- (8) 『論壇』の別刷りとしての発行期間。その後、1927年に同名のまま週刊誌として独立し、副題「チェコの知的な女性の新聞」*List české inteligentní ženy* や「モダンな女性の新聞」*List moderní ženy* を付して1931年まで続いた。
- (9) 原語 Hrad. 「フラト」とは、小文字で始まる場合、一般名詞で「城」を意味するが、大文字で始まる場合、固有名詞となり、独立以降の大統領府を指す。独立以降、大統領府はプラハ城に置かれたためである。その派生形として、大統領に近い人物らも含めて「フラト」と呼ぶことも多い。
- (10) Zdeněk Kárník. *České země v éře první republiky (1918-1938): Díl první: Vznik, budování a zlatá léta republiky (1918-1929)*. Praha: Libri, 2003, s. 340. および Zdeněk Kárník. *Malé dějiny československé (1867-1939)*. Praha: Dokořán, 2008, s. 205. 後者では、「共和国の懸案事項を批判的かつ思慮深く理解することに、ジャーナリズムにおいて他の誰よりも長けていた」と評価されている。
- (11) Hockaday, op.cit., p. 135.
- (12) イエセンズカーの記事については、長年イラースコヴァー氏が発掘に貢献し、大方わかってきたところではあるが、いまだ全てが把握されているわけではない。刊行されているもので最新の成果である同書の付録にはイエセンズカーの記事一覧が掲載されており、その数は1164本である (翻訳連載は何十回にまたがるものも1本と数えている)。筆者もこれまで現地調査を繰り返し、記事を「発掘」してきたため、同書と突き合わせてみたところ、筆者が見つけてい

る記事で、同書に掲載されていないものもあり、筆者が見落としていたものもある。そのため、両方を突き合わせて数えた。したがって、本稿で示した記事数が、現時点で最新のデータである。

- (13) 内訳は、翻訳が 55 本（但し、連載を 1 本と数えると、27 本）、フェイェトンと呼ばれる一面の下方欄に掲載される文芸記事が 34 本、厳密な意味で服飾をテーマとするものが 175 本、それ以外が 27 本である。
- (14) 内訳は、翻訳が 150 本（但し、連載を 1 本と数えると、11 本）、フェイェトンが 29 本、モード記事が 620 本、アンケート募集記事が 10 本、編集記 1 本である。
- (15) 原語: Rubrika ze dne. 英訳すると “Section of the Day” といったところ。したがって、日本語に直訳すれば「今日の一欄」といったところであろうか。ここでは、本文の通り「今日のコラム」とする。
- (16) イエセンスカーの記事の最後の 4 本(1930 年 4 月 20 日付、4 月 27 日付、5 月 11 日付、6 月 1 日付) の記事は、「家庭」が外され、「モード・社会」欄に変更している。
- (17) “Even in her articles specifically addressed to clothing, fashion was in fact a secondary issue: she was more interested in the lifestyle of the new generation, and considered dress to be only its expression.” Eva Uchalová. *Czech Fashion 1918-1939. The Elegance of the First Republic*. Praha: Olympia, The Museum of Decorative Arts in Prague, 1996, p. 47
- (18) Marková-Kotyková, *op.cit.*, s. 35.
- (19) Milena Jesenská. „Koupelna, tělo a elegance”, *Národní listy*, 23.1.1923. s. 4.
- (20) Milena. „Hubená a štíhlá.”, *Národní listy*, 3.5.1925. Vzdělávací příloha s. 2.
- (21) Milena JESENSKÁ. „Zvenčí a uvnitř”, *Národní listy*, 1.10.1925. s. 6.
- (22) Ibid. 下線は筆者によるもの。以下、同様。
- (23) Ibid.
- (24) Ibid.
- (25) ヤン・ネヘラ (Jan Nehera, 1899-1958) が 1923 年に立ち上げた服飾デザイン販売会社「ネヘラ」は、1930 年代には世界進出し、世界中に 130 店舗を構えた、チェコスロヴァキアでもっとも成功した高級ブティックの一つであるが、ネヘラは、1920 年代および 1930 年代の新聞や雑誌に多くの広告を掲載した。広告には「衣服は人を作る — ネヘラはドレスを作る」というコピーを使用した。また、チェコでは今もなお愛される喜劇俳優で劇作家のコンビ、ヤン・ヴェリフ (Jan Werich, 1905-1980) とイジー・ヴォスコヴェッツ (Jiří Voskovec, 1905-1981) の 2 人は 1934 年に「衣服は人を作る」というタイトルの歌を共同で作詞し歌った。このように、1920 年代から 1930 年代にとりわけ広く流布したことわざだといえる。なお、余談だが「ネヘラ」は 1945 年に国有化され、事実上「ネ

ミレナ・イエセンスカーのモード論 (一) (服装編)
——1920年代チェコに関する文化論的考察——

- ヘラ」ブランドは消滅したが、2014年に再建され、現在、再び世界の大都市に店舗を構えている。
- (26) Milena. „Všeho s měrou”, *Národní listy*, 1.5.1924. s. 9.
- (27) Ibid.
- (28) *Sčítání lidu v republice československé ze dne 15. Února 1921: II Díl (Povolání obyvatelstva) 4. část. (Československá republika)*. Praha: Státní úřad statistiky 1927, s. 12. (以下、*Sčítání lidu*)。事務職に就く女性の全体に占める割合については、拙稿「ミレナ・イエセンスカーの記事に見るモード記者の意義とその背景 —— チェコスロヴァキア共和国形成期において」『国際文化研究』第21号、東北大学国際文化学会、2015年3月、61頁、表1参照。
- (29) *Sčítání lidu*, s. 98. 具体的な数字は調査中。
- (30) 同書、表2参照。
- (31) Milena. „Zástěry do práce”, *Tribuna – Modní revue*, 28.5.1922. s. 3
- (32) M.J. „Obleky pro pracující ženy”, *Tribuna*, 20.3.1921. s. 8.
- (33) Ibid.
- (34) Ibid.
- (35) Milena. „Kravaty a bluzy”, *Tribuna – Modní revue*, 25.6.1922. s. 4-5.
- (36) Milena. „Zástěry do práce”。
- (37) Ibid.
- (38) 次の拙論において、理由の一端を論じた。半田幸子「ミレナ・イエセンスカーの男女観に関する一考察 —— ダブルスタンダード擁護に焦点を当てて」『スラヴ学論集』第21号、日本スラヴ学研究会、2018年6月、112-128頁。
- (39) Milena. „Něco pro domácnost”, *Národní listy*, 29.7.1923. s. 5.
- (40) Ibid.
- (41) エリザベート・ヴァイスマン『ココ・シャネル —— 時代に挑戦した炎の女』深味純子訳、阪急コミュニケーションズ、2009年、93頁。

Fashion Journalism in the Articles of Milena Jesenská(1)(clothes): A Consideration in the Study of Czech Culture in the 1920s.

HANDA Sachiko

This paper analyzes the 1920s fashion articles of Milena Jesenská, a popular journalist in interwar Czechoslovakia. It considers her attitudes toward fashion, how she viewed fashion at the time, and the messages she desired to convey to her readers through.

In this paper, I first summarize her career as a fashion journalist and the tendencies of the contents of her articles on three newspapers, (*Tribuna*, *Národní listy*, *Lidové noviny*) and the magazine (*Pestrý týden*). Second, I analyze her fashion articles to clarify her dominant view toward clothing in general and the concrete fashion styles she recommended for the workplace and home life.

This paper concludes that she emphasized both the exterior and interior qualities of person. That is, she placed equal emphasis on clothes and the body and soul. Besides this, she emphasized the harmony, the consistency, and necessary balance of both. It further concludes that there are differences of styles in detail but commonality in idea: practicality, functionality, and neatness. The final conclusion is that those ideas arose from her demand that her female readers garner mental independence.